

と客を名前で呼んだ。客も「ハジメさんも、あまり無理して疲れを出さないようにしてください。」と応えた。ハジメというのが父の名前だ。漢字で「一」と書く。  
「お待たせ。」

シライさんは玄関の外で待っていた少年に声をかけ、大きなバッグを肩に提げて歩きだした。私服姿にはあまり似合わない、リュックサックのようなバッグだった。

少年の家から『みちしお荘』までは、海に沿った一本道だった。夕方のなぎの間にさしかかって、風が止まり、よどんだ潮のにおいが濃くなっている。

「二人まとめて厄介払いされちゃったな。」

シライさんはそう言って笑った。ヤツカイバライの意味はよくわからなかったが、なんとなくシライさんが「俺たちは同じだな。」と言ってるんじゃないかを感じて、それがちよつとうれしくて、少年は自分から話しかけてみることにした。

「お父ちゃんと知り合いですか？」

「ああ。お父さんとも、亡くなったおじいさんとも知り合ってたんだ。」

「漁に出てたんですか？」

「いや、そうじゃなくて……。」

シライさんは歩きながらバッグの腹を軽くたたいた。「取材をしたんだ、おじい

なぎ

風がやんで、波が穏やかな状態になること。

介

8 厄介払い

さんの。」——シライさんは旅行雑誌の記者で、十二年前に祖父をグラビアページで紹介したのだという。

「見たこと、あります、それ。」

「そうか。おじいさん、カッコよかっただろ。」

少年は、こくん、とうなずいた。祖父を褒められてうれしかったのが半分、残り半分は、シライさんの話にうまくついていけたことで、うれしいというより、ほつとした。

祖父は地元で一番の腕をもつ一本釣りの漁師だった。今の、この季節——春先にはタイを狙う。夜明け前に港を出て、まだ日の高いうちに一日の仕事は終わる。

「その頃はまだ、お父さんは見習いみたいなもので、おじいさんの船に乗って、しょつちゅう叱られてたんだ。髪も今みたいな角刈りじゃなくて、リーゼントで……リーゼントって、わかるかな？」

本当はよくわからない。わからなくてもいいや、と思った。自分が生まれる前の父の姿はアルバムの古い写真で何度か見たことはあっても、こんなふうに誰かから話を聞くのは初めてだった。

シライさんは「あとで写真見せてやるよ。」と笑った。「たくさん持ってきてるんだ。」

少年は少し足を速めた。お父さんの知らないところで、お父さんの昔の写真を見

グラビアページ

雑誌などで写真を多用したページのこと。

紹

一本釣り

一本の針糸で魚を一匹ずつ釣り上げる漁法のこと。

リーゼント

髪型の一種。